

ワールドランゲージセンター (WLC) 第2ステージの挑戦



WLC長 尾崎秀夫

WLCは1998年に設立され、2018年をもって20周年を迎えることができました。この間、教職員、学生の皆様のご協力、ご支援のおかげで着実に発展を遂げることができました。謹んでここに感謝を申し上げます。一方、創価大学は2014年にスーパーグローバル大学創成支援事業に採択された。その目標達成に向け、WLCが中心的な役割を担うことが期待されている。同時に学内の英語教育に関わる体制や仕組みはこの20年の間に大きく変化した。WLCはこうした学内における期待と変化に適応しつつ、今後の10年、また20年の展開を見据え、進むべき方向と施策を示す必要に迫られている。それらを具体的に示しつつ、新たな目標を基に、この時をWLC発展の第2ステージの開幕と銘打ち、スタートを切っていく所存である。

WLCの目的は、そのミッションステートメントに、外国語運用能力と多文化共生能力を磨き、世界市民を育成していくことと定められている。世界市民については、智慧・勇気・共感を要件とする。WLCは主に共通科目言語科目、セルフ・アクセス・センター (SAC)、海外語学研修の運営を担っているが、これらのいずれにおいても、世界市民の育成を目指し、その要件である3要素の育成を図れるようであればならない。

まず、言語科目においては、英語科目を皮切りにヒューマニスティックアプローチ（人間性中心のアプローチ）を採用したいと考えている。ヒューマニスティックアプローチは、知識偏重型、人間性疎外の教育に疑問を投げかけ、人間性の開発を目指した教育運動の外国語教育における展開であった。ただし、ヒューマニスティックアプローチは観念的で実証性に乏しいなどの批判もあり、外国語教育の分野で広く実践されるには至らなかった。しかし、世界市民の育成を目指すWLCにおいては、その理念に学ぶところは多い。智慧・勇気・共感といった情意面の発達には、それを意識して教育活動に含めていかなければ、世界市民の育成という目的は達成できないであろう。WLC第2ステージでは、より計画的で実証性の高い、いわばネオヒューマニスティックアプローチの開発を目指したい。具体的にはイギリスで開発された教育方法の一つであるバタフライモデルを基に、目的・自他の役割の理解・計画・実行・評価の5つを含む学習プロセスに智慧・勇気・共感の情意要素を重ね、学習プロセスのどの段階がどの情意要素を強めるのかを明確にする。さらに、情意面の育成と連動させた学習プロセスを繰り返すことで、それが知識やスキルの

習得とどう関連するのかを実証する。そこでは認知スキルと非認知スキルの関連を探るのだが、同時にその結果、学習者の内面に生じる成長を記録する。これらを実現する授業形態を開発し、データを収集、分析することでWLCにおけるヒューマニスティックアプローチの効果を実証的に検証する。

次に、SACについてであるが、一段と自立した学習者の育成に取り組んでいかなければならない。WLCのSACは、学生、教職員の皆さまの多大なご協力のもと、年間利用者数が2019年には約25,000人に上るなど大きな成果を上げることができた。しかし、同時に本来、同様のセンターであれば目指すべき自立した学習者の育成方法の開発については、依然課題として残っている。自立した学習者の育成においては、基本的には先に言及した目的・自他の役割の理解・計画・実行・評価の5つを含む学習プロセスを自分で駆動し実行できる学習者を育成することになる。しかし、その学習プロセスを回すためには、教室環境を越えた動機付けが必要になるであろう。現状その動機付けは、自分のためにもなっていないが、同時に他の人のため、ひいては社会や環境のためにもなっているという状況を作り出し、その互惠的なつながりを学習者が真に実感できるときに生じるものと考えている。こうした心理的な状態を生み出す仕組みを考案していきたい。

最後に海外語学研修の運営であるが、グローバルコアセンターとの共催として2019年度より、フィリピンのイースト大学に春夏合わせて約100人の学生を各回10日間の語学研修に送り出している。日ごろはローカルに将来の雄飛を願い奮闘する学生たちであるが、この研修にあっては、グローバルに世界の状況をじかに体験することができる。WLCとしては、世界市民育成の格好の機会と捉え、事前事後のガイダンスの回数の増加や質の向上も合わせ、他に劣らないプログラムに発展させていきたいと考えている。

WLCは、設立以来20年を経て、多くの方々のご支援を頂き発展を遂げることができた。その皆様のご尽力やご期待に応えるためにも、WLC第2ステージの目標を上記のように掲げ、果敢に挑戦していく所存である。その結果をもって創価大学の発展に貢献していくことを決意している。

参考文献

白畑知彦他 (1999) 『英語教育用語辞典』東京：大修館書店

地球規模問題に英語で切り込む WLCグローバルレクチャーシリーズ (GLS)

GLSは、国際機関、学術、あるいはビジネスの分野において国際舞台の第一線で活躍する専門家を講師に招き、地球規模の課題について語っていただく英語での講演会である。2012年から、学期に1回、年2回開催し、2019年度で16回を数えるに至った。毎回各界から優れた講師を招待するのに苦労も伴うが、これまでのところ目的に合う講師を迎えることができていく。主な参加対象である学生に、講演を通して世界の諸問題に目を開き、将来の職業選択の一助としてもらうことも目的の一つである。普段は聞くことができない内容であったり、出会うことのない講師であったりするため、参加する学生には大きな啓発の場となっている。

一定の成果を上げてきたGLSではあるが、昨今講演会には変化が生じている。まず、トピックについては、2012年初回開催当時の意図を反映し、概して国際開発問題、平和紛争、難民問題などが多かった。現在はWLC第2ステージの取り組みを意識し、地球規模の問題だけでなく、文化・芸術についての講演も含めていくよう心掛けている。WLC第2ステージでは知識・スキルの習得と人間性の開発の両方を目指す。実際に2019年度秋学期には民音研究所所長オリビエ・ウルバン氏による「SDGs（持続可能な開発目標）を奏でる：地球意識のための音、歌、声」と題する講演を行った。音楽を通して世界を変えていこうという内容は、GLSが扱う新たな領域を示したことで意義深い講演となった。

GLSを始めた当初は、一定の英語力のある学生を対象としていたが、2016年度から、門戸を広く開放し関心のある学生には積極的に参加を促すこととした。そのために、二つの工夫を始めた。一つは講演の前に事前学習会を持ち、講演で扱われるトピックについての基礎知識や専門用語を学べるようにした。もう一つは、WLCセルフ・アクセス・センター（SAC）と協力しGLSが開催される週のイングリッシュ・フォーラム（留学生スタッフと日本人学生が国際問題等について英語で討論するプログラム）の話題を、GLSのトピックにし、そこで一度議論を経験した上で、講演に参加できる道筋を作ったことである。両者の取り組みは概ね好評で参加学生の講演の理解を助ける試みとなっている。またスーパーグローバル大学創成支援事業の成果を反映し、留学生の参加も多くなってきた。GLSは多様な背景を持つ若者がともに世界の諸問題について熱心に考え、語る場へと変貌してきている。門戸は学生のみならず、教員にも広げられ、教員がGLSに参加した場合、FD活動の一環として認められ、FD講演会・研修に参加したものとみなされるようになっていく。

今後の課題は、参加する日本人学生の理解をさらに助けるため、一段と工夫を凝らすことである。すでに講演の途中で随時質問タイムを取る、理解の確認をするためにペアやグループで話し合うなどのことが計画されている。さらに、これらの時間を学生ボランティアがリードして行うことができればなおよいと考えている。2020年度からは、地球規模問題のみならず文化・芸術に関するトピックも含めつつ、日本人学生の理解度を上げるのを目標に一段と充実したGLS開催を目指していく所存である。

WLC プロフェッショナル・ ディベロップメント (PD)

WLCにおけるPDは、教員の教育力を向上させる目的で研究会とピア・オブザベーション（教員の相互授業参観）として展開している。両者をもって、教員の指導力、研究能力の向上を組織的に図ることを目指している。

WLCに所属する多くの教員は日本語が母語でないため、学内のFD活動に参加しづらい。そのため、WLC独自に研究会を持つようにしている。研究会はランチタイムとイブニングの2種類のセッションがある。ランチタイムセッションでは、授業において用いる実践的な指導法や活動の紹介に焦点を当てている。これまで、ロールプレイの行い方、エッセイライティングの指導方法、ジャーナルの用い方、ディスカッションスキルの育成方法などが扱われた。イブニングセッションでは、研究活動の支援を目的とし、教員が多様な研究方法や最新の動向に触れられるトピックを選んでいる。扱ったテーマには、学会発表のプレゼンテーションスキル、学生が身につけるべき21世紀スキル、学内倫理審査委員会申請書の書き方、内容言語統合学習などがあつた。

研究会の新しい試みとして本学大学院国際言語教育専攻英語教育専修（TESOL）と連携し、英語教育専修が海外から招聘する研究者をイブニングセッションの講師として招くことを始めた。イブニングセッションの講師はWLC内から募ることが多かったが、現在は語学教育の専門家である海外招聘教員に指導を仰ぐことができる。最近では2018年の招聘教員であるジュディス・オローリン氏のトランスランゲージングの紹介が記憶に新しい。外国語教育では、教室での学習者の母語使用をどのように捉えるかは重要な問題である。21世紀に入りグローバル化の影響は外国語教育にも当然及んでいる。これまで外国語教育においては、学習者の母語の動きに積極的な役割を与えてこなかったかもしれないが、グローバル化の影響が教室環境にも及ぶ今日においては、母語の役割一つとってみても、従来どおりでよいとは思われない。母語の果たす役割に積極的な価値を見出すトランスランゲージングの概念と実践は今後のWLCの教育方針を定める上で大切な指針を与えたものと思われる。その他、現在は尾崎センター長によるWLC第2ステージプロジェクトとコリン・ランドル副センター長によるCEFR導入プロジェクトがイブニングセッションを通して進められている。これらもWLC FD活動の新しい取り組みの例である。

研究会は一定の成果を上げているが、課題もある。それは、日本語が母語でないため、本学や日本の教育的課題が見えにくく、そこから立ち返って自分たちは何をすべきかという視点が持てないことだ。その結果、自分たちの視点に偏った活動になりがちになる。この課題の解決には日本語の分かる教員が、日本語を母語としない教員に状況をよく説明すること、日本語を母語としない教員も日本の語学教育の一端を担う存在であり、そのために自分たちの資質を向上させる必要があるという意識を持つことが大切である。

また、定期的に行われているピア・オブザベーションは、教員同士が互いの授業を参観しフィードバックを与え合う取り組みである。授業の前後に教員同士が会い、授業の目的や指導の手順、評価方法などを確認し、授業参観に入る。授業後はあらかじめ決めていた方法で指導内容や学生の反応などを振り返り、評価する。授業観察者は、授業実践者が効果的に授業を振り返ることができるよう手助けする。教員であれば誰でも感じるように、自分の授業を他の教員に見てもらい助言をもらうことは指導力の向上に欠かせない。その意味で、ピア・オブザベ

ーションは大きな成果を上げてきたと思われる。ただし、ピア・オブザベーションには時間がかかりすぎる欠点があり、現状のままでは忙しい教員の指導力向上に最適の方法とは言えない。手順の簡略化など対応が求められる。

PDはWLCの目的である「世界市民の育成」を達成するのに不可欠の活動である。これまでの実践を振り返り、必要な修正を施し、今後も質の高い活動を推進していきたい。

WLC CEFR導入プロジェクト

2018年、創立20周年を迎えたWLCはその目的を再検討する絶好の機会をもつことになった。検討の結果、2つのプロジェクトに着手することになった。一つはヒューマンスティックアプローチの推進、もう一つは英語科目の目的と方法論を明確にすることであった。後者は、共通科目英語科目(English I-IV)をCommon European Framework of Reference (CEFR)に基づき改変するものである。

CEFRは、A1・A2(基礎段階の言語使用者)、B1・B2(自立した言語使用者)、C1・C2(熟達した言語使用者)の6つのレベルがあることでよく知られている。各レベルは、“Can do (=その言語を使って具体的にできること)”の例を含む広範なリストによって説明されている。さらにCEFRは、生涯にわたり言語学習を継続するために自己評価を行う「言語ポートフォリオ」で構成される。従って、CEFRは単なる言語能力テストとは一線を画する。

では、なぜ共通科目英語科目(English I-IV)はCEFRに基づくべきなのか? WLCは、過去20年の間に進化してきた様々な共通科目英語科目とセルフアクセスプログラムを提供している。その一方で、スーパーグローバル大学創成支援事業のもと、学内には幅広い学部英語科目とプログラムが確立してきた。その中には海外留学や英語だけで全課程を修了できる制度も含まれている。この多様性の中にあって、学生の異なるニーズやレベル、学習目標に対応し、可能な限り他のプログラムと重複しない科目を提供することはWLCにとって不可欠なことである。CEFRは、プログラムや科目の内容を客観的に記述するのに役立ち、異なる科目やプログラムの透過的な比較を可能にする、世界的に認められた基準である。従って、CEFRはWLCが必要に応じて科目の内容を評価し修正することを可能にする。さらに、学生が在籍中のみでなく、将来にわたり自分の言語学習の進捗状況を確認できる言語ポートフォリオも提供できる。ポートフォリオは、学生の将来の雇用者に、彼らのグローバルな英語能力を証明するツールにもなる。以上のことから共通科目英語科目のうち、先行してEnglish I-IVにつき、CEFRに基づいた改編を行うこととした。

CEFRの導入は、2019年に始まった。1年次の選択必修科目であるEnglish IとIIの改編に焦点を当てた3つのワークショップに、WLCの常勤教員全員が参加した。プロジェクトの内容を把握した後、教員は担当する科目の目的とレベルを決定するためミーティングを重ね、その結果、CEFRの“Can do”ステートメントを使用した新しい科目の記述が完成した。2020年には2年次対象のEnglish IIIとIVもCEFRに基づいた改編を施すため、同じプロセスを繰り返す。学生を対象に大小の調査も実施し、彼らのニーズが今後の科目の記述に反映されるよう計画している。2020年秋学期から、このプロジェクトはWLCセルフ・アクセス・センターを対象として行われ、その後ほかの共通科目英語科目、留学を含むWLCプログラムへと適用範囲を広げる予定である。

CEFR導入プロジェクトは、共通科目英語科目に明確な目標と一貫した記述を提供することですでにその効果を発揮してい

る。印象的なのは、CEFR ワークショップを通し、対話を通して共通の目的を追求し達成するという新しい文化をWLCに定着させ、言語教育におけるヒューマンスティックアプローチを強化するもう一つのプロジェクトをうまく補完していることである。

2018年度よりWLC主導で 海外語学研修を開始

WLCでは、2018年度より海外語学研修を開始した。本学交流校の一つであるフィリピン・イースト大学で約10日間、英語を学ぶプログラムであるが、研修を開始するに当たり、WLC教員と先方の担当教員が相互に大学を往来し、本学学生向けに共同で開発した。WLCはその使命に「世界市民の育成」を掲げている。その達成に向けた取り組みが、従来の外国語科目とセルフアクセスセンターの運営という範囲を超えて新たに始まった。

本研修の主な特色は以下の3点である。

(1) 実践的な英語を使用するアクティビティが豊富

教室内では、グループワークやプレゼンテーションを多く行い、学生が発言する機会を増やしている。さらに、現地学生との交流などを通し、実践的な英語を使用するアクティビティを多く設けている。

(2) 異文化理解の機会が充実

海外で学ぶという利点を最大に生かし、イースト大学内外での文化交流や史跡訪問を積極的に行うなど、フィリピンの文化や社会問題を学ぶ機会をふんだんに提供している。特に現地で活躍するNGO職員の講演会は専門家の生の体験に触れることのできる貴重な機会と捉えている。

(3) 事前・事後講義を実施

研修出発前と帰国後のそれぞれのセメスターで3時間ずつ、計6時間の事前・事後講義を、WLC教員が実施している。現地での研修と連動した内容であることはもちろん、目標設定や振り返りを英語で行うことで、より研修での学びを深化させる狙いがある。



アクティビティを通し、英語を実践的に使う学生たち

本研修を開始したこの1年で既に春夏の長期休業期間に5回の研修を実施し、約150名の学生が参加した。学生からは、現地学生との交流や、英語を実践的に使う機会が多かったことに非常に満足しているとの声が多数寄せられ、帰国後の学習意欲の向上にも結び付いている。本研修は、実際に研修がスタートしてからも、英語教授法の専門家であるWLC教員が引率として研修を視察し、現地の担当教員と繰り返し打ち合わせを行い、改善点を速やかに反映するなど、柔軟に対応できることが強みである。学生の語学運用能力と異文化理解能力の向上のため、本研修を更に充実させ、「世界市民の育成」に貢献していきたい。

修了生が語るプログラムの魅力

GCPディレクター 佐々木 諭

2019年3月に20名のグローバル・シティズンシップ・プログラム（GCP）生がGCP課程を修了し卒業を迎えた。2010年にプログラムが開設され、2014年に修了生を輩出してから7回目の卒業式となった。これまでに170名を超える修了生が卒業し、研究者、外交官、公務員や外資系企業を始め様々な分野で活躍している。GCPを担当する教員にとって修了生の活躍ほど嬉しいことはない。社会に出て経験を積み、より専門性を高め、責任ある立場で活躍している修了生もいる。今回は社会で活躍する修了生が語るGCPの魅力を紹介したい。

GCPの魅力の第一として、現在ハーバード大学メディカルスクールで免疫細胞を研究する菅原将さん（GCP1期生、2013年度卒業）は、アカデミックな英語スキルを徹底して磨くことにあると語っている。菅原さんは理工学部を卒業後、ジョーンズ・ホプキンス大学大学院博士課程に進学し、医学博士号を取得した。「GCPでは、アカデミックな場面で使われる英語力を徹底的に訓練されたことと、研究における思考力が身についたおかげで、博士課程で研究していても、授業等についていくこともできました。色々な角度から研究者としての心構えを教えていただいたことが今につながっています」と語っている。

また、論理的に考える力を鍛えることもGCPの魅力の一つである。大手電機メーカーで働く三田部直樹さん（GCP4期生、2016年度卒業）は、「GCPの講義では、社会でも活きる『インプットする力』と『アウトプットする力』を磨くことができました。重要な情報を見つけ出し、知識と結び付け問題の理解を深めることができる『インプットする力』、また、伝えたい内容を明確にし、相手に納得してもらえるよう論理的に説明する『アウトプットする力』は、クライアントの問題を理解し、解決する提案の土台となっています」と実社会でもGCPの学びが活きていると振り返る。

法学部を卒業した黒川真希さん（GCP2期生、2014年度卒業）は、現在弁護士として民事事件や家事事件を取り扱いながら、海外のロースクール進学も目指している。黒川さんが語るGCPの魅力は夢を追い続ける力にあるという。黒川さんがGCPを選んだ理由は、専門性の学びに加えて語学力を向上させることができるプログラムであることが大きかった。国際的な仕事ができる弁護士

になることを目指してGCPに入ったが、法律と英語の勉強の両立は困難の連続であった。黒川さんは、それでも「私が諦めずに続けることができたのは、私の夢を心から応援して下さったGCPの先生方、共に切磋琢磨した仲間のおかげ」であり、困難を乗り越えるたびごとに、夢に挑戦する力が高まったと話している。

最後に、東京都の公立小学校教員として働いている若井美咲さん（GCP2期生、2015年度卒業）を紹介したい。若井さんは教育学部在学時に、ケニア・ナイロビ大学に留学し、第5回アフリカ開発会議（TICAD V）学生サミットへの参加、世界ユネスコ会議の学生ボランティアなどにも挑戦した。若井さんは、「GCPでの学びをとおり、縁する人を大切にすることを学びました。志高く多様な個性や視点を持ったGCPの仲間や先輩・後輩、どこまでもサポートして下さる教職員の皆さんなど、人生を変えるような人々との出会いがありました」と振り返る。GCPで学んだ、周りの人々から学ぶ姿勢、世界を身近に感じる生活、個々の良さや探究心を励ますことなど、現在教員として目の前の子どもたちを育むことに活かされていると自信を持って語っている。

GCPが育成を目指している世界市民は、それぞれの立場で価値を創造し、社会貢献をなしゆく人材である。GCPの学びが、修了生の力となり、土台となっていきようこれからも教職員と一緒に力をあわせて取り組んでいきたい。



GCP1期生菅原将さん（真中）と博士課程の指導教員であるジョーンズ・ホプキンス大学医学部アンドレア・コックス教授（左）、アシュウィン・バラゴバル准教授（右）



総合学習支援センター (SPACe)の取り組み

2019年度秋学期も、多くの学生さんにサービスを利用してもらいました。主に日本語で対応する支援サービスには、大きく分けて学習相談およびピア・サポート、オアシス・プログラム、日本語ライティング・センター、学習セミナー、調べごと相談があります。2020年度も、どのようなサービスを提供できるか、引き続き考え、改善していきたいと思っています。

学習相談およびピア・サポート、オアシス・プログラム

学習相談は、春学期と比較すると、利用者は少なくなりますが、主に履修相談者の減少によるものです。その代わりに、授業内容であったり、国際課やWLCの英語学習相談に行く前の、「留学に行くか迷っています」相談が増えます。利用動機も教員に勧められてというよりも、自分が必要だと思ったから利用したという学生が全体の70%を占めます。また、2年生以上の利用も、増えてきています。学習相談はポータルから予約が可能ですし、スタッフに余裕があれば、飛び込みでも対応しています。もし、特定の内容について相談をしたい場合は、予約をすることをお勧めします。相談内容によって、対応可能なスタッフを選ぶことができます。

ピア・サポートも3年目に入り、多くの学生さんに利用してもらえる

ようになりました。このサービスのターゲットは、GPA的には問題があるわけではないけれど、モチベーションが持続しない人となっています。7週間、特定のスタッフとペアで定期的に面談をすることで、時間管理や優先順位を確認することでモチベーションを保つことを目的としています。各学期に2回、利用申請をすることができます。ポータルでお知らせするので、チェックをしてください。

オアシス・プログラムも、学生さんから是非利用したいといわれるサービスになってきました。臨床心理士、社会福祉士の専門スタッフが学期をとおして伴走してくれます。教職員のみならず、「誰か」専門の人が定期的にサポートすれば、大学生活がより良く過ごせるのと思われる学生さんがいれば、ぜひご紹介ください。

日本語ライティング・センター

日本語ライティング・センターでは、レポートチュータリング、レポート診断でアカデミックライティングの支援を行っています。レポートを書くことは、一朝一夕にはいきません。学生生活の集大成として卒業論文を書くためにも、継続的な練習が必要となります。現状の利用者は表1のように1年生が圧倒的に多いですが、2年生以上にも

ひ活用していただきたいサービスです。レポートチュータリングは一人対一の対話ベースのセッションを行います。レポート診断はチェック表とコメントによる紙上の支援です。2019年度秋期の利用者は表2の通りでした。

表1 学年別チュータリング利用者数

14年度生	1
15年度生	6
16年度生	34
17年度生	2
18年度生	2
19年度生	257

表2 2019年度秋期利用者数

	9月	10月	11月	12月	1月	計
レポートチュータリング	4	68	105	83	42	302
レポート診断	1	4	75	4	13	98

表3 2020年度実施予定イベント

図書館イベント名	
1	図書館脱出ゲーム
2	グループ・ブック・トーク
3	うそ?本当?
4	フジビで哲学カフェ
5	アクティブ・ブック・ダイアログ
6	ビブリオバトル
7	RFA (読書の初級)
8	ABDファシリテーター養成講座

この他に日本語ライティングセンターでは図書館と連携して読書推進運動 (SOKA BOOK WAVE) を行っています。秋期は、本の読み方セミナーとして「Read For Action」、レファレンスイベントとして「うそ?ほんど?」、読書イベントとして各グループで1冊の本を読み合

い共有する「Active Book Dialogue」を実施しました。2020年度も表3のようなイベントを予定しています。多くの皆様のご参加をお待ちしています。

学習セミナー

学習セミナーは、約150名の学生さんが参加してくれました。自己管理やレポート系のセミナーが様々提供されます。時

期に適したものを企画しています。ポータルを通じて掲示されますので、定期的にポータルをご覧くださいと思います。

調べごと相談

「SPACe調べごと相談」のコーナーでは、レポートや卒論の参考文献検索、データベースの利用方法、その他の調べごと等の相談に応じるレファレンスサービスを行っています。(週3日間/一日3時間在席)

相談内容は、初年次科目である「学術文章作法」の担当教員と連携しているため、この科目を受講している学生からの質問が大部分を占

めています。他に、「卒論」やその他の授業、又、GCPといったプログラムを受講している学生からも参考文献や調べごとについての相談があります。

2019年度から予約制度 (Googleフォームを活用) を導入しており、より効果的なサービスが出来るようになりました。

SPACe調べごと相談 (レファレンス) 利用者数 / 2019年度春学期

	4月	5月	6月	7月	春学期	%
学術	0	13	12	5	30	70%
卒論	0	1	0	4	5	12%
その他	1	2	1	4	8	18%
	1	16	13	13	43	

SPACe調べごと相談 (レファレンス) 利用者数 / 2019年度秋学期

	9月	10月	11月	12月	1月	秋学期	%
学術	0	7	9	14	4	34	67%
卒論	2	1	3	0	0	6	12%
その他	3	4	2	2	0	11	21%
	5	12	14	16	4	51	

2019年度 合計

	年度	%
学術	64	68%
卒論	11	12%
その他	19	20%
	94	

■ 第6回FD・SDセミナー

2019年11月8日（金）に、学士課程教育機構の佐藤広子准教授を講師として、2019年度第6回学士課程教育機構FD・SDセミナーを開催しました。

「読解力向上につなげる教職学協働の取り組み ―初年次教育科目『学術文章作法Ⅰ』と日本語ライティングセンター、及び図書館SBWとの協働を通して―」をテーマとして、ご講演いただきました。

学内の教職員23名が参加し、アンケートでは「学術文章作法Ⅰの内容を学部教育にも繋げていきたいと思う」「日

本語ライティングセンターのサポートを学生に紹介したい」「SBWの内容はオリジナリティーがあり興味深く、授業でも活用したい」等の声が寄せられました。



■ 第7回FD・SDセミナー

2019年11月22日（金）に、2019年度第7回学士課程教育機構FD・SDセミナーを開催しました。

「特色ある授業実践から学ぶ(2)」と題し、「法学部におけるビジネス&ローワークショップの取組について（法学部：朝賀広伸 教授）、「抽象度の高い政治理論科目を英語で講義する（国際教養学部：山田竜作 教授）、「ICT活用の五年間 ―ポータルサイトの機能を利用した授業改善―（文学部：山中正樹 教授）」「数学系科目の授業設計について ―黒板、ポータルサイト、小テストの活用について（理

工学部：北野晃朗 教授）」「母性看護学における授業展開（看護学部：片岡優華 助教）」をそれぞれテーマとして、授業の取り組みにおける効果や今後の課題についてご報告いただきました。

学内の教員36名が参加し、アンケートでは「学部は異なっても共通している点が沢山あり、授業設計の見直しに活かしたいと思った」「"New idea about AL was useful"」「ICT活用の授業実践が興味深く、授業での導入を検討したい」等の声が寄せられました。

■ 第8回FD・SDセミナー

2019年12月6日（金）に、関西学院大学教授の朴勝俊氏を講師としてお迎えし、2019年度第8回学士課程教育機構FD・SDセミナーを開催しました。

講演の冒頭、聴衆を引き付ける技法の一つとして「落語」



を披露いただきました。続いて、「心をつかむプレゼンテーションの技法」をテーマに、①論文とプレゼンの違い、②従来のスライド（PPT等）の一般的な使用方法に対する問題提

起、③スライド作成の改善及び具体的なアドバイス、④サンプル論文等についてご講演いただきました。

講演の内容は分かりやすく参加者の興味を引くものであり、教員の授業や学生の発表のために参考になることが伺えました。

36名（教員26名、学生10名）が参加し、アンケートには、「ただ情報を伝えるのみではなく効果的に分かりやすく発表したり、人の心に訴える話し方や表示をすることの大切さを学ぶことができた」「スライド使用時には、Photoや動画の活用をさらに増やして、学生の関心を高める授業を工夫したいと思う」「予想より何倍も有益な話を聞くことができ、友人にも伝えたいと思った」等の声が寄せられました。

■ 第9回FD・SDセミナー

2020年3月7日（土）に、熊本大学教授の鈴木克明氏を講師としてお迎えし、2019年度第9回学士課程教育機構FD・SDセミナーを開催する予定でしたが、新型コロナウイルスの発生・拡大に伴い、開催中止となりました。

そこで、東北大学の「PDPonline・PDモジュール（高等教育の教職員の能力開発プログラム）」を活用させてもらい、セミナーの参加予定者にはオンライン授業という形

で鈴木先生の講義「インストラクションデザインへの誘い」の受講をお願いし、報告書を提出してもらいました。

オンライン授業の受講者からは「このような充実したものがあつたことを学べたことも勉強になった」、「講義だけではなく演習や実習での指導にも生かせる内容もあつた。興味をもって今後も教育の在り方について学んでいきたいと考える」等の声が寄せられました。

■ 2020～2022年度のFD・SDの目標について

創価大学では、これまでに様々な全学的なFD・SDを進めてきました。例えば、授業外学習時間向上（2008～10年度）、シラバスのより一層の活用・充実による教育の質保証（2011～12年度）、シラバスの到達目標の共有化による授業改善（2013～14年度）、シラバスの「到達目標」測定を意識した授業の展開（2015～16年度）、個人レベルの授業改善と同僚性に基づく教育改善の推進（2017～19年度）などです。これらの取組を通して、単位の実質化、授業科目レベルでの教育改善、学習成果の可視化とその結果に基づく授業改善を推進してきました。

2020年度からは、2019年度までのFD・SDの展開状況や反省を踏まえ、『アセスメントを意識した各学部独自のFD・SDと階層別FD・SDの推進』を目標にしました。具体的には、従来の全学を対象としたFD・SDから、新任

教員向け、若手教員向け、役職者向け、学部長・副学長向け等の階層をより意識したFD・SDへと転換していく予定です。個別具体的な課題を解決するために必要な研修プログラムの提供ができるように、より学部の自主性や個々の教員の自主性に期待したFD・SDに移行します。

その過程で、全学的に提供するFD・SDのプログラムは、下の表に示すような実践的な勉強会やワークショップ形式での開催を検討しています。学士課程教育機構が実施するフォーラム・セミナーについては、回数を減らしていくとともに、各学部レベルにおいて、FD・SDの実質化を進めていきます。

具体的な内容・日程のスケジュール等は今後、確定しだい、公表します。

今後、実施を検討しているワークショップ・セミナーの例

	ワークショップ（半日以上）	セミナー（90分程度）
新任教員向け	FD入門 シラバスの書き方 AL入門 ICT活用教育入門	伝わる話し方 効果的なパワーポイントの使い方 学習ポートフォリオの活用 効果的なクリッカーの活用
全教員向け	授業設計の方法 LTDの活用法 評価の仕方 アカデミック・アドバイジング ICT活用教育の導入方法	合理的配慮について BYODを前提とした授業づくり 学生のキャリア形成支援 PASSを使った授業改善
学部教務委員向け	カリキュラム設計 IR（実践編） アセスメントの方法	大学改革の方向性 IR（入門編）
学部長等向け	中教審の答申に関する勉強会 高等教育政策に関する勉強会	大学のマネジメントやガバナンス

学士課程教育機構 新任教職員紹介

GCPディレクター ……………佐々木諭
GCPコーディネーター……………井田句一 勘坂泉
学士課程教育機構 准教授…高橋薫
SPACe 助教…………下園勇磨 康潤伊 高橋博美
WLC 教授…………ウィリアム・スナイダー
講師…………アンドリュー・ツィード アスカ・ハルバート フォレスト・ネルソン
助教…………大村孝紀 アグネス・マリア・フランシス

